

親と子どもの意識と行動

—親子ペア調査から見た階層差—

藤田 武志*

(平成19年10月1日受付;平成19年11月15日受理)

1. はじめに

子どもの教育達成(学業成績や将来展望など)が、その出身階層によって規定されていることは、すでにさまざまな角度から検証されている。たとえば、子どもの将来展望(教育アスピレーション)に及ぼす階層要因の影響力は、同じような学歴社会である韓国よりも日本のほうが大きいことや(有田 2002)、学業に向かう意欲についても階層による格差が拡大していること(荻谷 2001)などが明らかにされており、教育における階層分析の重要性がうかがわれる。

階層と教育に関する研究では、階層は親の学歴や職業、所得水準などの要因によって把握され、それらと子どもの教育達成との関係が分析されてきた。しかし、これまでの研究では、階層要因と教育達成とを直接つなげて分析しており、両者を媒介している要因には着目していないことが多い。では、階層要因が子どもの教育達成を規定している場合、その要因と教育達成はどのようにつながっているのだろうか。特に、階層が異なる親たちの意識や行動には、子どもの教育達成に影響を及ぼすような、どのような違いが見られるのだろうか。

階層要因と教育達成を媒介する要因を探究することは、理論的に重要なだけでなく、階層格差を縮小していくために、どのような働きかけや取り組みが必要かといった実践的な要請に対しても大きな意味を持つと言えるだろう。

そこで本研究では、親の意識や行動に着目して、階層要因と教育達成との関係を探ることを主題とする。

2. 先行研究の検討

子どもの教育達成の規定構造について、階層要因以外の要因にも着目した研究として、たとえば次のようなものがある。

有田(2002)は、教育達成の説明モデルに、「大学に進学したら勉強は面白くなる」という「消費効用」要因を加えると説明力が上昇すること、その消費効用要因は階層によって規定されていることを明らかにした。同様に本田(2004)は、教育達成の説明モデルを拡張し、勉強が面白いかどうか、役立つと感ずるかどうかという、子ども自身による主観的意味付与である「学習レリバンス」と教育達成の関係を検討している。

これらは教育達成の説明モデルに「パーソナリティの階層差」*1(藤田 1991)という要因を導入して実証的に検討した点で重要である。しかし、階層による解釈図式の違いは子ども自身に対する質問紙から把握されており、それが親世代とどうつながっているのかは検討されていない。

それに対し、親世代と子どもの教育達成のつながりを、親と子どもの両者に対する調査によって検討したものに耳塚(2007)による研究がある。それによれば、親の学歴や職業に加え、教育期待、所得や学校外教育費支出といった要因が子どもの教育達成に影響している「ペアレントクラシー」の状況が明らかにされた。これは、学校外教育支出といった経済的要因の影響力が大きいことを明らかにした点で重要である。しかし、学歴や職業、収入といった要因がどのような「パーソナリティの階層差」をもたらし、学校外教育支出の多寡として結果しているのかは分からない。

そこで本研究では、①親世代と子どもの両者を「親子ペア調査」によってつなげ、②そのつながりを「パーソナリティの階層差」という観点から検討する。

3. 研究方法

本研究で用いるデータは、犬山市教育委員会と東京大学基礎学力研究開発センターによる「犬山教育改革の評価プロジェクト」によって得られた。筆者もメンバーの1人としてプロジェクト参加し、2005年3月に、犬山市の教員全員(400名)、小学5・6年生の児童全員(1305名)、中学1～3年生の生徒全員(1761名)、調査対象となった子どもたちの保護者全員(2590名)を対象とした質問紙調査を行った。

調査は犬山市における教育改革の評価を目的に行われたものであるが、調査票には勉強に関するさまざまな意識を問う設問などが多く含まれており、本研究の主題を追究するのにも適している。

*生徒指導総合講座

今回は、それらのうち子どもと保護者を対象とした2つの調査を用いる。なお、調査の詳細については荻谷他(2006)を参照されたい。

4. 教育達成の階層差

子どもたちの教育達成の階層差は、今回の調査でも確認することができるだろうか。残念ながら学力テストは行っていないため、授業の理解度に関する自己評価と進学希望の2つを、便宜的に教育達成を示しているものとして考察を進めることにしたい。

まず、階層差については、保護者調査において父親の職業と学歴を尋ねた設問を利用することにする。職業については、1995年SSM調査の威信スコアを割り当て、学歴については教育年数を割り当て、それらを主成分分析にかけて合成変数を作成し、その合成変数を3分割したものを階層を示す変数として使用する。

次に、授業の理解度については、子ども対象の調査における「あなたは、学校での授業をよくわかっているほうだと思いますか。」という設問を用い、「5(よくわかっているほう)」から「1(ほとんどわかっているほう)」までの5件法の数値を利用する。また、進学希望については、「あなたは、将来、どの学校まですすみたいと思っていますか。」という設問を利用し、中学から大学院までの選択肢に教育年数を割り当てて分析する。

表1は、授業の理解度と進路希望年数の平均値を階層別に比較したものである。一元配置分散分析の結果、授業の理解度 ($F=51.959, p=.000$) と進路希望年数 ($F=90.623, p=.000$) はともに有意であり、階層が高くなるほど授業の理解度も進路希望年数も平均値が高くなっている。

階層	授業の理解度	進路希望年数
上位	3.6	15.2
中位	3.3	14.6
下位	3.1	13.9
平均値	3.4	14.6

表1 階層別に見た授業の理解度と進路希望

これまでの先行研究と同様、教育達成が階層によって規定されていることが、本調査でも確認された。では、この階層の違いは、どのような解釈図式の違いと結びついているのだろうか。さらに探究していこう。

5. 保護者のパーソナリティの階層差

学歴や職業によって、パーソナリティ(解釈図式)はどうか異なるのか。前述の有田や本田が、勉強に関する子どもたちの解釈図式の違いが教育達成に影響を及ぼしていることを見いだしていることから、ここでは学校での勉強を保護者がどのようなものとしてとらえているのかを探り、そこに階層による違いが見られるのかどうかを検討しよう。

まず、勉強に関する意識に関する諸設問を主成分分析にかけ、2つの主成分を析出した*2(表2)。第1主成分は、「よく勉強した人が、金持ちになれる」、「今の世の中では、学校の成績によって将来が決まる」など、学校での勉強が将来の生活を左右するかどうかに関わる設問の主成分得点が高い。それに対し、第2主成分は、「どんな家で育っても、成績は本人の努力次第だ」、「誰でも頑張れば頑張るだけ、人に認められる世の中だ」など、成果をもたらすのは個人の努力なのかどうかに関わる設問の主成分得点が高い。

これらのことから、第1主成分は、勉強と将来の社会生活との結びつき方に関する解釈図式であり、第2主成分は、勉強と個人の結びつき方に関する解釈図式として把握することができるのではないかと。ここでは、前者について、勉強を将来と結びつける「連結性」とし、後者については、勉強を個人に帰責する「個人性」としておこう。

では、これらの解釈図式は階層によって異なっているのだろうか。その点を探るため、連結性と個人性について、

	1	2
よく勉強した人が、金持ちになれる	0.803151	0.073327
有名な学校を出た人のほうが、将来、自分の好きなことができる	0.77463	0.08999
よく勉強した人が、いい学校やいい会社に入れる	0.736156	0.034217
よく勉強した人が、しあわせな生活がおくれる	0.722648	0.147301
今の世の中では、学校の成績によって将来が決まる	0.627126	0.04033
能力によらず、誰でも努力すればよい成績をとれる	0.080199	0.698591
誰でも頑張れば頑張るだけ、人に認められる世の中だ	0.079033	0.622415
どんな家で育っても、成績は本人の努力次第だ	0.0108	0.580618
失敗したとしても何度でもやり直せる世の中だ	0.11764	0.563514
大学を出ていなくても能力があれば成功できる世の中だ	0.26659	0.480804

表2 保護者の勉強に関する意識の主成分分析

それぞれ得点の高い群と低い群に2分割し、それらを階層とクロスさせた(表3・表4)。その結果、いずれにおいても2つの変数の関係は有意であり(カイ2乗検定)、これらの解釈図式が階層によって規定されていることがうかがわれる。

連結性については、階層が高くなるほど連結性をより感じている保護者の割合が増える。それに対し個人性については、興味深いことに連結性とは逆に、階層が低くなるほど個人性をより感じている保護者の割合が増加するのである。

現在の勉強が将来の生活と結びつくと考えなければ、勉強への動機づけも相対的に弱まるだろうから、上記の連結

	階層			有意確率
	上位	中位	下位	
連結性・高	56.1	48.7	45.9	***
連結性・低	43.9	51.3	54.1	
N	704	610	708	

表3 連結性と階層 (***: $p < .001$)

	階層			有意確率
	上位	中位	下位	
個人性・高	45.7	50.8	52.4	*
個人性・低	54.3	49.2	47.6	
N	704	610	708	

表4 個人性と階層 (*: $p < .005$)

性と階層の関係は理解しやすい。それに対し、個人性と階層の関係についてはどう考えることができるだろうか。たとえば、勉強を本人の問題とすることは、勉強しやすいような環境を調えるといった方向に向かうことを阻害したり、「本人にやる気がないならばしかたがない」といったあきらめを助長したりする可能性が高いだろう。それは、いわゆる「教育する家族」とは逆向きの志向性だと言える。そう考えるならば、上記のような個人性と階層の関係も首肯できるのではないだろうか。

それでは、連結性と個人性という2つの解釈図式の関係はどのようなものなのだろうか。連結性と個人性という解釈図式に関する2つの軸を組み合わせると、勉強に関する解釈図式の類型が4つ得られる。すなわち、①連結性が高く、個人性が低いケース、②連結性が高く、個人性も高いケース、③連結性が低く、個人性が高いケース、④連結性が低く、個人性も低いケースの4つである。上記の表3と表4から考えれば、「連結性・高」で「個人性・低」という組み合わせの階層がもっとも高く、「連結性・低」で「個人性・高」という組み合わせの階層がもっとも低いことが予想される。その点について確かめてみよう。

表5は、解釈図式の4類型と階層とをクロスさせたものである。両者の関係は有意であり(カイ2乗検定)、予想されたように、「連結高・個人低」の類型の割合が、階層が高くなるほど多くなり、逆に、「連結低・個人高」の類型

	階層			合計	有意水準
	上位	中位	下位		
連結高・個人低	32.1	24.3	21.3	26.0	***
連結高・個人高	24.0	24.4	24.6	24.3	
連結低・個人低	22.2	24.9	26.3	24.4	
連結低・個人高	21.7	26.4	27.8	25.3	
N	704	610	708	2022	

表5 解釈図式の4類型と階層 (***: $p < .001$)

の割合は、階層が低くなるほど多くなるのが分かる。では、これらの解釈図式の違いは、子どもの教育達成とどう結びついているのだろうか。

6. 保護者の解釈図式と子どもの教育達成

勉強に関する保護者の解釈図式の違いは、子どもたちの教育達成の違いをもたらしているのだろうか。その点について確かめるため、授業の理解度と進路希望年数の平均点を解釈図式の類型別に比較してみた。

一元配置分散分析の結果、授業の理解度 ($F=4.582, p=.003$)、進路希望年数 ($F=11.726, p=.000$) についてはともに有意であり、いずれにおいても、「連結高・個人低」の類型の平均値が高く、「連結低・個人低」の類型の平均値が低い(なお、進路希望年数では、平均値が最も低いのは「連結低・個人低」の類型であった)という結果になった(表6)。階層要因と子どもの教育達成が、保護者の勉強に対する解釈図式によってつながっている可能性が高まったと言えるだろう。

解釈図式	授業の理解度	進路希望年数
連結高・個人低	3.44	14.90
連結高・個人高	3.37	14.58
連結低・個人低	3.28	14.30
連結低・個人高	3.26	14.32
平均値	3.34	14.53

表6 解釈図式の4類型と子どもの教育達成

しかし、表6の結果は、結局のところ階層要因に回収されてしまうのではないかという疑念も生じる。つまり、授業の理解度や進路希望年数の平均値が高くなるのは、「連結高・個人低」の類型には階層の高い子どもが多いからに過ぎないのではないかという疑念である。その点について確かめるためには、階層が同じ場合にも、解釈図式の違いが教育達成の違いを生み出しているのかどうかを検討してみることが有効だろう。

そこで、ここでは「連結高・個人低」の類型と、「連結低・個人高」の類型の2つを取り出し、同じ階層における2つの類型の教育達成を比較してみることにしよう。

階層	項目	解釈図式	平均値	有意確率
上位	授業の理解度	連結高・個人低	3.62	**
		連結低・個人高	3.54	
	進路希望年数	連結高・個人低	15.45	
		連結低・個人高	14.98	
中位	授業の理解度	連結高・個人低	3.48	*
		連結低・個人高	3.32	
	進路希望年数	連結高・個人低	14.93	
		連結低・個人高	14.45	
下位	授業の理解度	連結高・個人低	3.17	†
		連結低・個人高	3.11	
	進路希望年数	連結高・個人低	14.15	
		連結低・個人高	3.71	

表7 階層別に見た解釈図式の類型と子どもの教育達成

(† : $p < .1$, * : $p < .05$, ** : $p < .01$)

表7に示したように、いずれの階層においても、「連結高・個人低」の類型の平均値の方が、「連結低・個人高」の類型の平均値よりも高い。しかし、t検定の結果、その差が有意であるのは進路希望年数についてだけであった。とはいえ、少なくとも進路希望年数については、保護者の勉強に対する解釈図式が子どもの教育達成に独自の効果を与えていることは確かである。

7. おわりに

本研究では、保護者のパーソナリティの階層差という観点から、階層要因と子どもの教育達成との関係を探ってきた。その結果、パーソナリティの階層差について、第一に、保護者自身が勉強をどのようなものととらえるかが異なっていることが見いだされ、第二に、その解釈図式は、勉強と社会との関係に関わる「連結性」と、勉強と個人との関係に関わる「個人性」という2つの軸から成ることがうかがわれ、第三に、その解釈図式の違いには階層が関わっていることが判明した。そして、第四に、保護者の解釈図式によって子どもの教育達成が異なっており、第五に、それは階層によって規定されつつも、解釈図式独自の影響力を教育達成に対して与えている可能性があることが明らかになった。

これらのことから、教育達成の説明モデルを考察する際に、保護者の「パーソナリティの階層差」に着目することの有効性が示唆される。これまで、教育達成の説明モデルを拡張する際に、子どもの主観的意味づけの有効性が主張されてきたが、保護者自身の主観的意味づけに着目することも視野に入れる必要があるだろう。

また実践的には、保護者の勉強に対する解釈図式が子どもの教育達成に影響を与えているならば、その解釈図式を変容させるような働きかけをしていくことが、子どもの教育達成の階層差の縮減につながっていく可能性もあるだろう。

う。

では、今後の課題を指摘して報告を終わりにしたい。一つは、保護者の解釈図式の違いがどのようにして子どもの教育達成の違いへとつながっていくのか、そのメカニズムの探究である。子ども自身の解釈図式とはどのような関係にあるのか、また、勉強時間や勉強への取り組み方などのパフォーマンスにはどう影響しているのかといった点を探究していく必要があるだろう。

もう一つは、保護者の解釈図式の影響が、子どもの学年進行によってどう変容するのかという問題を探ることである。今回の分析では、小学生と中学生をまとめて分析しているが、そこを細かく見ていくことによって、保護者のインパクトがどのようなものなのかが明らかになっていくだろう。

子どもの教育達成の格差には家庭環境の影響力が非常に大きいことは明らかであるが、そのメカニズムについては今後もさらなる探究が求められている。

【引用・参考文献】

- 有田 伸 2002, 「教育アスピレーションとその規定構造」中村高康他編『学歴・選抜・学校の比較社会学』東洋館出版社。
藤田英典 1991, 「近代社会の階層的再生産メカニズム」宮島喬他編『文化と社会 —差異化・構造化・再生産—』有信堂。
本田由紀 2004, 「学ぶことの意味 —『学習レリバンス』構造のジェンダー差異—」苅谷剛彦他編『学力の社会学』岩波書店。
苅谷剛彦 2001, 『階層化日本と教育危機』有信堂。
苅谷剛彦他 2006, 『教育改革を評価する 犬山市教育委員会の挑戦』岩波書店。
耳塚寛明 2007, 「学力と家庭的背景 —保護者調査を用いた小6算数学力の分析—」お茶の水女子大学JELS第10集。

* 1 人々は階層によって異なるレリヴァンス体系（パーソナリティ）を持っており、その解釈図式の違いが経験的世界に関する解釈の違いや、慣習的・戦略的な行為の違いを生成しているということ。

* 2 第1主成分は、寄与率が約28%、第2主成分は寄与率が18%であった。

Socioeconomic Status and Educational Attainment: the Influence of Parents' Attitude

FUJITA Takeshi*

ABSTRACT

Educational attainment is influenced by socioeconomic status (SES). What mediates between these two factors? Assuming that the parents' attitude is the intermediary, we examine the attitude of different SES parents, which effects on their child's educational attainment.